読書感想文"羅生門"

加来間沖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
読書感想文”羅生門”

【Ｎコード】
Ｎ２０８０Ｗ

【作者名】
加来間沖

【あらすじ】
読書感想文で羅生門を書くことにした少年。
無事読書感想文を書き終えるのか？
人物画を描いてみました。
音椰・武田しかまだかけてません。
ｈｔｔｐ：／／ｘ３１．ｐｅｐｓ．ｊｐ／ｋａｋｕｍａｏｋｉ／ａｌｂｕｍ／？｜ｃｕｓ＝ｌｓｙａｉｙ＆ａｍｐ；ｃｎ＝４４

序

今日は8月31日。この言葉を恐怖の日ととるのか、それとも夏休み最後の思い出の日ととるのかは自由です。この物語はよく有りがちな、前者の話である。

残った宿題は、読書感想文だ。そうそう名乗ってなかったな。山崎信太郎という名前の少年はショタ体系だが、そこは関係ないので（たぶん）そういうのが苦手な方（いろんな意味で）も大丈夫です。

さて彼は中学2年生。どこにでもいそうなゲームセンターに行って金を浪費し、友達の家で漫画を読んだりした結果、宿題が残ってしまった少年だ。

彼の中学校では読む本が制限されていて、好きな本が読めないのだ。

彼は昔からなんとなく好きな作家である、芥川龍之介の作品にした。芥川龍之介さんの作品は3作品が制限内にあり、彼は”鼻”か”歯車”のどちらにしようと悩んだが決まらなかった。しょうがないので間を取って”羅生門”にした。

彼は原稿用紙を部屋から探し求め遂に5枚見つけ出した。この中学校鬼畜な事に4枚半書く必要があるのだ。これより下で（）に入っている文は少年が書いた作文内容である。

姉の教科書に羅生門が載っているのは知っていたので、羅生門のページを開き読み始めた。

…10分後。「よし書くぞ」気合を入れるために呟いた。

まず羅生門と書き、名前を書く。さあいざ本文へ。

（僕は芥川龍之介さんの主人公の目線で読んでいれば、内容がすぐに分かると分かりました。）と書こうとしたが、僕という漢字がわからなかったのでパソコンで”ぼく”を検索すると”朴”とでた。

そんな漢字があったのかと思いながらそのしたにあった”僕”に選択しなおした。
続けて、設定を簡単に書いた。（この物語は平安時代の終わりで人々の心が…。）
（そして下人の心の移り変わりを書いた物語です。場所は羅生門。そこに１人の下人。）と記入して手を休めた。早くも半分埋まった。

「アイスうめー」ラクトアイスを噛みながら呟いた。
そして再開。
（初めての下人の心は＞ここで死ぬしかないのか。まあ盗人になるより死んだほうがいいよな＜というものでした。）
（その夜、下人は羅生門の上で光が不気味に光っているのに気づきます。そして…。）

俺はその後、老婆に太刀を向ける所まで書いた。よしここでなんかギャグみたいなのいれるかな？
なんとなく入れたくなった俺はいれた。
（下人が太刀を突きつけ大股で老婆に歩み寄った。これに対し老婆は、どっきりに掛かった芸人みたいに負けず劣らずのリアクションをひろうしてくれた。）
…微妙。まあいいか。
（そして老婆は逃げようとしますが、下人は押し戻します。下人は１５才から１８才くらいです。案の定、老婆は敗北を喫します。）
案の定という言葉が使えてすっきりした少年は昼飯を食べに居間に戻った。
さて少年は無事作文を書き終えるのか？

序（後書き）

よければ読書感想文の参考にでもしてください。

昼飯その後

家は誰もいない。親は仕事か買い物だ。唯一の姉はミュージカルだ。

このミュージカルの終了時間は居間のホワイトボードに書かれている。１６時３０分終了予定。

「じゃあ帰ってくるのは６時くらいかな」この予定時間は当てにならない。３０分遅れて当然だ。帰ってくる時間を足せば１時間半ほど増えてもおかしくない。

しょうがないので冷凍庫のチャーハンを温めてた。４分３０秒…。タラタタタタタラララー♪という音を出し終了を告げる。「熱ちっ」皿を持った瞬間手が焦げそうに鳴ったので、タオルを手に巻いて皿を取った。

ガツガツとすばやく食べたつもりだが２０分も掛かってしまった。部屋に戻り作文の続きを書き始めた。

（下人は太刀を向け何をしていたのか聞こうとします。だけど老婆は顔で下人を殺さんと言わんばかりに見ています。しかし下人は老婆がびくびくしているのを見るなり、口調を緩めた。理由を話せばそれでいいと言った。対し、老婆はかつらを作ろうとしたといった。すると下人はまた怒りだした。）と勢いよく書き上げた。我ながらびっくりする早さだ。

そして腕の色に同化した、チャーハンの焼けてない白い米粒が付いているのに今頃気づいた少年はそれを取って口に入れ飲み込んだ。

さてさてこれからどうやって書くかな？

再び老婆に視線を戻すか。うん。普通にそうだな。（これをみた老婆は、なるほど死人の髪を…）

教科書に書いてあるのを自分風にしてそのまま写した。（こうして自分の罪を老婆は正当化したのだ。）

「さて結構書いたし終わらせるか」

しかしどう終わらせたらいいのか分からなかった。

時間は午後2時だった。おやつの時間には終わらせたい。（小学生か？）後半へ続く。

ん？まてよ

ん？まてよ。少年はふと思った。ここで終わらせようとしたときであった。この後下人は、老婆がいったことが正しいなら俺が貴様の服をハギッとても怨みはせんな。そうせねば俺も飢え死にをする身なのだ！みたいなことを言って老婆の着物を剥ぎ取り羅生門からさっさと逃げていった。

そして最後に”下人の行く方は　誰も知らない。”である。

老婆の着物を剥ぎ取っていって、いくらになるんだ。少年はふと思った。

そうだ！少年はピカンと思った。授業で教えてもらったことはうそなんだ！！

（その正当化されたことを思って下人は盗賊になる決意をするわけですが、最初に悪だといって老婆に刃を突きつけ、今度は気が変わり老婆の着物を剥ぎ取るとはえらく身勝手な人だなと思いました。）

これでいんだと思った少年の筆は止まりません。

（大体この下人、カツラのほうが売れるのに何故、わざわざ服を取ったのでしょう。この下人無能すぎです。死人の服を取るなり、そのまま老婆を殺して金銭を持ってないか探すなどをすればいいのに、なぜしないんでしょうか。

そして服を剥ぎ取るなり、さっさと逃げるなどどんな腰抜け人間なんでしょう。こんなのが盗人になれるはずが無いのです。そして最後に下人の行く方はだれもしらないとなっていますが知ってるはず無いんです。たぶん数日後死体になってますよ。下人はあまりに

も小さい。せこせこ雨の下で悩んで、あばらなんか年じゅう気にして、しかも何も出来ないのです。これでは駄目です。とても飢餓の世の中を渡っていくことなんか出来ません。人生の敗北者です。僕は宣言します。この下人は、ほどなくせこせこした盗みをしくじって、その時、斬り殺されてしまうに決まっています。）

そして少年はしめの言葉としこう書いた。

（つまりは心理描写に指向性を与えておいて、読者が皆さんご一緒に騙されるように仕組んだのです。すごい演出方法です。さすが龍之介です。僕が見込んだ小説家です）

（僕は将来、こんなコソコソした屑野郎にならないように気をつけようと思います。）

「よし書けた」ちょうど時計は3時を指していた。

下人の行く方は誰も知らない。俺も知らん。そんなどうでも事を思いながら、翌日作文を出した。

＝少年がどうなったか俺は知らない。＝

ん？まてよ（後書き）

どうも。ありがとうございました。ああ、これで終わりじゃないんで心配なく。

では今日はここまでで。

同じ感想文＝序＝

羅生門を書いた少年がどうなったのかは知らない。その友達はどうだったのか？

「ねえ、写させて」「いいよ」数人で集まって羅生門の感想文を写しあっていた。

その少年達の内2人が終わっておらず、3人が終わってゲームをしたり、見ている。動物の森というなつかしのゲームをしているわけだ。このゲームは通信で遠くの奴と遊べるらしい。”らしい”というのは著者がそのゲームをしたことが無いから分からないのだ。

その昨日で登録している友達の村にいけるらしい。そしてこのプレイしている人がいたずら好きなのだろう斧を持ってその登録している友達のところに行ったのだ。

パスワードか何かがあるのだろうが設定してないらしい。

斧を持って木を切り倒し果物を食いまくった。びっくりしたのかそのイタズラされた側は、この少年らを追放した。

まあそんなことよりも問題は読書感想文だが、写している奴は神聖なアホだ。

丸写しだ。

（おそらく下人の心の中には一生、光が指すことは無いのだろうなとお思いました）などを（たぶん下人の心に光がさすことは永遠に無いでしょう）などと変えればいいのに、丸写しをしている。

まあ最初に紹介した少年の感想文を丸写しするよりはまともだろう。

と、思っていたがやがてこの少年の作文も下人は無能です。という文が出てきていた。”無能”は今ブームなのだろうか？

動物の森でのイタズラを追えた少年らが戦争系のゲームに変えて１０分後丸写しに成功した。

少年はその次の日読書感想文をだすのだが、そうなったか。今度は教師目線から見ていこう。

同じ感想文＝教師＝（前書き）

前回最後の行に、そうなったか、と書いてありますが、どうなったかの間違いです。m（＿＿）mスイマセ…ｚｚｚ

同じ感想文＝教師＝

この日、栄三郎はがっかりしていた。職業は自由気ままな読書感想文を書いたやつらのクラスを受け持っている教師だ。

がっかりというより呆れている彼が見ているのは、自由気ままなやつらが書いた読書感想文だ。

「バカだな…1字1句違いやしねえ…」同じ内容の感想文を見てがっかりしていた。

「大体なぁ将来の夢まで真似するなよ…」

（僕は下人と違い夢があります。僕はサッカー選手になります）

一体どこでそういう展開に陥ったのか不思議だが、突っ込み場所はそこではない。

「おいおい竹浜お前…田岡の作文丸写しするがバレバレならまだいいけど（良くない）将来の夢まで写すなよ。お前…造船技師になるんじゃなかったのか？」

教師は何故か泣きそうな気分になった。まあこんな感想文がでてくれば、そんな気持ちになるだろう。

最初に紹介した少年は仲大樹というのだが、この作文を見てもう笑ってしまった。もう笑うしかない。人生の敗北者って何だよｗｗｗ。この言葉は彼がやっている卓球の部活動で生まれたらしい。

さてそのクラブ仲間の塚田だが、彼はかなりまともな作文を書いている。だがなんかやたら難しい漢字が多い。漢字検定1級の奴の文を読むのはかなり難しい。

例）
桑港
布哇
華盛頓
紐育

みたいな感じだ。お前らこれ読めたか？
上から順にサンフランシスコ・ハワイ・ワシントン・ニューヨークだ。。

読めたら漢字検定1級を受けることを薦める。

9月2日
大体はだらだらして登校してくる。夏休み中体調を崩して2人休んでいる。
さて私我受け持っているクラスで読書感想文で羅生門を出していたのは計10人だ。そんなに人気なのか？
そして鼻が6人。歯車が3人。芥川龍之介がそんなに好きか？有名か？他の奴もなんか渋い奴を書いてる。お前らの性格からしてそうは思えんのだが。

もう知らん今日は飲みに行くか。明日は休みだし。

同じ感想文＝教師＝（後書き）

もうなんの話か分からなくなってきましたが、とりあえず読んでくださった方ありがとうございます。

新・羅生門

羅生門それは平安時代の末期をモデルにして作られた作品だ。しかしこの物語は違うようだ。

２０ＸＸ年　一人の少年が自転車で町を走っていた。時間は８時になるだろう。冬の低い気温に体を震わせながら少年は白い息を吐き出しひたすらこいでいる。

彼は中学校の野球部の部員らしく野球帽をかぶってそのまま自転車に乗っている。中学生と分かった理由はその自転車に中学生のステッカーが張ってあったからだ。

「しかし…でも…それでもどうしたものかなぁ」日本語になっていないような台詞を呟き夜道を走っている。彼がこいでいるところはだんだん人気がなくなっている。家も少なく…山に入っていく。

そして少年が自転車を止めたのは幾分か古そうな家だった。「…ただいま」寒いせえで体が震えていたと著者は記したがそうではないようだ。

「お・か・え・り」と角が生えて体から炎が吹きでらんばかりの女性がたっていた。「こんな時間までどこにいたんだ！！この野郎！」女性とは思えない下品な言葉を吐き捨てたこの人は母親のようだ。

「ふぅ今日は散々だったな」こってり絞られて少年は風呂につかり飯を食べ、布団に入っていた。まったく夏休みの宿題は残ってるし、でも遊びたいし。どうするかな。

少年が残してい宿題は読書感想文だ。

８月２２日　この日にちで残り読書感想文だけというのは早いと思うのだが…おやは怒っている。たぶん皆さんの親がこのお母さんだったら宿題を３１日までためる皆様に呆れて精神的に異常をきたして、病院送りになるであろう。

読書感想文って何書けばいんだ？

「羅生門でも書いときなさい」親がその言葉を待っていたといわんばかりに机の上においていた本を差し出した。「さて書かないと、夕飯抜きだからね」昭和の母さんみたいな言い分だ。大体今、朝の７時半だ、夕飯の話しをしてもぴんとこないだどうし、この少年がこの時間からしようとしているのだから、それをほめてもいいのではないだろうか？

少年は部屋に閉じこもった。「やはり物語の世界に入らないと分からないよな」少年はそう呟いた。引き出しからガサガサと物を探し出した。「あったあった」少年が探し出したのはその本の中に入ることができる優れものだった。ＳＦ作品でよくありがちな奴だ（無かったらごめん）。

少年はさっそく羅生門のページを指定し物語の中にワープした。

新・羅生門＝2＝

暗い。雨で地面は濡れている。無事ワープできた。とりあえずゴーストタウンとでもいうべきだろうか？いやそれより酷い。一応このワープ機能でその時代にふさわしい格好に変装できる。上と草履はとうじのままにしてある。フンドシまで時代に合わせる気はない。

まず来て思ったのが、臭い。死臭だ。ふと見るとそこにはハエがぎっしり顔にとまった男が倒れていた。不思議なことに血飛沫がでている。恐らくカラスに食われてのだろう。それにしても酷い。

羅生門の上では明るく光が灯っている。下人と老婆の話をみようとして俺は息を殺し、なおかつ音を立てないように昇った。途中からこの時代の人物に触れない代わりに他の人からも見えないという機能で来ているのを思い出し勢いよく昇った。音も消音だ。しかしこれは向こうの音が聞こえる。

今として思えばとてもおかしなことだった。そして羅生門の前で倒れていた死人はほほに大きなニキビがあった。

「うっ・・」俺は思わず声を出した。無理も無い死体が四散しているのだ。あわてて消臭機能を利用した。そしてそこの情景を見た。

そこには黄色くなった古いボロキレをまとった老婆と下人が経っているのにきずいた。下人の服は思ったよりキレイだ。

老婆は何かぶつぶついっている。下人はそれを黙って聞いている。俺はこの空気を感想文に書くことにした。（重苦しい空気に包まれた中下人は黙って老婆の話を聞き・・）作文の内容を決めているうちに下人はあるものを出した。それが何かと分からないうちに下人は老婆の頭にソレを当て打った。

老婆はもんどりうって倒れた。なんだ！！意味が分からなかった。下人が何故拳銃を持っているのか分からないし、大体老婆を殺す理由が無い。そして羅生門の内容をある程度している俺はある行を思い出した。

下人は左だったかみぎだったか忘れたが、頬にニキビがあるのだ。今目の前にいる殺人者は無い。俺は羅生門の下で死んでいた１７歳くらいの男のほほにニキビがあるのを思い出した。

「ま・さ・か」俺は思わず声を出した。するとその下人と思わしき殺人者はこっちを向いて笑い出した。「そうだよ。下人は死んでいる」こっちの姿が見えている時点で目の前の男は下人ではない。

そう俺がワープした世界はこの男によって書き換えられていた。

偶然でもこういうことは無い。こういうことができるのは意図的にしか起こせず、また簡単に出来ない。しかし目の前の男は実際に俺がワープした世界のなかにワープしてストーリーを変えている。

俺は思わず逃げ出した。ワープ機能を使って逃げ出した。俺は無事現実世界に戻った。しかし問題はアノ男がおれになんらかの考えを抱いているのだ。でなければ俺の羅生門の世界にワープなどしてこないだろう。

俺はとんでもない事件に巻きこまれていた。

新・羅生門＝3＝

羅生門にいた男の謎が俺の頭を支配していた。
あわてて現実世界に逃げ込んだ俺だが人のワープ空間に入り込むような男だ、下手すればここまでやってくるかもしれない。

俺はあせっていた。学校が読書感想文など出さなければ良かったんだと学校をうらんだが、そんなことをしても何も換わらないと分かった少年は対策を考えた。

ワープ空間に他の人が入れるのは共有設定にしてないと無理だ。仮にしていたとしても招待状のようなものを送るかまたは入ってもいいですか？などのメッセージが来る。しかし男はいた。

俺の頭は感覚神経がはち切れるほど回転したが答えは出なかった。
”不安”というものが少年の頭を支配していた。
”恐怖”というものが少年の体を支配していた。

２つの似たような感覚にとらわれた少年は友人を呼ぶ今年にした。お母さんにはなんかいろいろいった結果「はいはい。分かった。じゃあ２８までには完成させなさいよ」と大幅に時間をくれた。
もちろん事件のことはいってない。

友人は家が遠いからいやだとかいっていたが宿題見せてるといった瞬間態度が変わった。人間の心はは結構もろいものだ。

友人達が昼ごろ来た。

「さて侵入男さんをとっ捕まえますか」「いやいや相手は銃を持ってんだろ」「なにこっちもいろいろしてるぜ」1番最初から言った奴が武田、音椰、最後に本間だ。

一応ワープするとはいえ半電子戦である。つまり電子空間にワープしたような感じだ。電脳コ〇ルという作品にめがねが登場するがあの世界にワープできるといえば何人かは分かってくれるだろう。

この友人らは電子世界でサバイバルゲームとかいって電子プログラムでいたずらをしている。こんな商品が売られているこの世界はもう終わりを覚悟しているのだろう。もう世界は終わりだ。

そんあことは分かっているのだが、電子だろうがなんだろうが怪我をする。

銃など当たったらたまったものではない。

そんなことを気にしないこの3人は何なんだろう。正確には本間の兵器が見たいだけで2人は行く地位張っているだけだろう。

そして俺と3人はワープしていった。

【俺の家の1階】

…今までに電子世界のワープが通じなくなったなどの問い合わせが１００３件届いています。これは何者かによる…おかんが1階でテレビを見ていた。俺がこの事件とかかわっているとも知らず、のんきにまんじゅうを食べていた。

新・羅生門＝3＝（後書き）

Ｑ　なんでこうなった？
Ａ　知らない。

Ｑ　こういう話にする予定だった？
Ａ　まさか。

Ｑなんでこうなった（2度目）
Ａ　知らん。

真・羅生門＝僕らの戦いの始まり＝

俺らは羅生門の近くで話していた。非常に衛生上悪そうだ。
原作羅生門によると盗人がすみついているらしい。そして木片か何かを持っていたのを見間違えただけではないかという話になっていた。
男は独り言を言っていたといことにすればつじつまが合う。

まあ、仮にそうだとしてもその物語とは違ってる時点でどうにかしてるが…。

「な、俺の今の説明で納得したか」と武田が言った。「でもどうして物語と変わってるの。だってさこの話にワープしたのにそれっておかしいじゃん」本間が口を挟んだ。
「じゃあ侵入はしてないけどだれかが、ハッキングみたいなのをしたんじゃない」音椰が自信満々でいった。
おれはその話を聞いて少し安堵した。
「じゃあ音椰のようにエラーが起きて物語り変わったのか」と聞き返した。

・・・・・・・・・・・・・・間・・・。

何故ここで間が空いたんだ。率直な話しそうだ。
何か言おうとしてみんなの顔を見た。
「ん・・・？」俺は不意に声が漏れてしまった。みんな顔色変だな。何を見ているんだ・・・

ザワッという奇妙な気配を感じおれが動こうとしたその時だった、

皆が声を上げ羅生門から離れた。

俺も立ち上がって１０歩は走っただろうか「フッ逃げるんじゃねーよ。待ちなよ」その時耳が痛むような音が後方から聞こえた。俺はとっさに伏せた。

伏せても無駄だと分かっているが伏せた。何故無駄かというと音が聞こえて伏せ始めても襲い。ライフルにいたっては球のほうが速い。

「うわっ」悲鳴のようなまた声変わりしてない、苦しい声が聞こえた。

音椰がドサッと俺から1メートルほど離れた場所で倒れた。幸い血が出てない。まあ仮想空間だからこういうのはあまり痛みを感じないように管理局が設定している。

「次はお前だな」男は俺に銃口を向け撃った。ワープ装置がはじけて壊れた。

！ワープ装置はこれまた管理局のほうで壊れないようになっている。なぜならこれは現実世界と電子仮想化空間を行き来して壊れたら戻れないのだ。故意に壊そうとしても管理局専用の機械でしか壊れない。衝撃を受けると逆に硬度と粘着率が高くなる素材なのだ。

もちろん耐熱効果がある。大和の主砲等を食らわない限り大丈夫だろう。それにそういう場合は必ず制限で感覚が無くなりその物語とは触れることが出来なくなる。

それを男はただの拳銃で壊した。

つまり壊れそうなものが出たら強制ワープ送還か、物語を見ることしか出来ないかのどちらかだ。戦争系でこれは多い。

見たところ男が持っている拳銃はコルト・ウッズマンという22口径の22LR弾を使用する自動拳銃だ。自動拳銃を単発でワープ装置を壊すとは距離が20メートルとはいえ動いている相手のものを確実に破壊するのだ。凄腕だ。

感心しているところではない。電子仮想空間管理局はワープ装置が壊れたことが分かるようになっていた救出に来るのだがまだ来ない。

その時「食らえ電子トラップ」イタズラ好きの本田の声と共に謎の大穴ができた。男は落ちた。光の速さで。

そんなことより俺はそのばをさっさと逃げ出したかったので、痩せて軽い音椰をおぶりダッシュでその場から逃げた。

【現実世界】現在電子仮想空間で謎のワープ機故障との誤送信が相次いでます。現在アクセスはしないでください。

ワープ装置のラジオ（？）みたいなのを聞いていた。

俺たちはどうなるのだろうか？誰も知らない。

完全に安全なシステム…。

それを男はただの拳銃で壊した。

真・羅生門＝僕らの戦いの始まり＝（後書き）

読んでくださった方ありがとうございます。

真・羅生門＝絶望の始まり＝（前書き）

少年達４人が電子空間に移動し謎の男に接触した。それと同時に電子空間と現代との連絡が途絶えた。

残された少年達に”絶望”が襲う

真・羅生門＝絶望の始まり＝

「さてどうする？てかどうなる」と本間が呟いた。「まさか電子空間に取り残されるとわな」「あの男のせえだろ」「そんなやばい奴と俺ら同じ電子空間にいるのかよ！参ったな」もはや誰が何を言ったのか分からないがとりあず分かっているのは・・・・。

「やばいな」そのとおりだ音椰。拍手しそうになってやめた。ここで拍手したら正気を疑われて、電子空間から抜け出したら精神病院に送られるかもしれん。タメに精神病院に送られるってどんなギャグ漫画だ？まあそんなことより・・・。

「電子機能で今何が使える？」そのとおりだ武田。てかお前ら俺のセリフさっきから盗んでないか？

「なあ黙ってないでお前も何か言えよ」ようやく俺は口をあけた。「…どうなるんだろうな」俺は空気が重くなったのを感じあわてて「そうだっ本間今何が使えるんだっけ？」と本間に質問をぶつけた。

「えーとね。服装変更とか消音機能は使えるな。使えないのを言ったほうが早いな」「さっさと言えよ」音椰が変な声でふざけていった。

「だが断る」なんかのアニメできいたことがあるようなセリフを本間が言い返した。…お笑いコントでもしてるのか？満点大笑いにしてやるから少しまじめになってくれ。

「使えない機能は”ワープ”と”現実世界との通信”とかの現代に関する奴は駄目だ」「今俺たちがおかれているのはインターネットに繋がってないウェブページと同じだ」意味が分からないひとは

ためしてみよう。ウェブページを開く。ネット接続を切る。そのウェブページは見れるが他のページにはいけない。読み込んだ部分は見れるのだ。大体分かってくれただろうか？俺たちはそんな状況下に置かれている。

最悪だ。

俺たちがいるのは羅生門から５００メートル離れた場所でそこから先は黒い壁のようなものに包まれている。ワープ機能で来た電子空間はその物語の半径５００メートルの電子空間がサービスとして移動できる。

あの男はどこにいる？

その時外で銃声が聞こえた。連続で発射される銃声だ。ダダダダダ…と表す表現では物足りない、それは腹に響く音だった。

それは俺たちに絶望の地獄に落とす音だった。

「どこだガキども。鬼ごっこをいつまで続けるんだ？」武田の顔がひきつっているのが月の明かりで見えた。そしてその月の明かりで小屋の前（崩壊同然だが）に音とともに土埃がたった。弾が着弾したらこうなる。

「おい来たぞ」武田が声を抑えきれずに言った。「今思ったんだけど銃ってあたっても少し痛いだけなんだよな」と音椰。

「とりあえず逃げたほうがいいと思うんだが」俺の言葉に本間は「激しく同意する」といってみんなで一目散に逃げだした。

本間は少しあせっていた。このとき俺はいや誰も知らなかった。
だが本間はソレを知っていた。まわりくどいようだがソレが俺たちに与えられた酷すぎる絶望だった。

真・羅生門＝絶望の始まり＝（後書き）

絶望のふち追い詰められる少年達。
ソレとは何か？それが新たに絶望を生み出すことをまだ3人は知らなかった。

真・羅生門＝向けられた銃口＝

「おーい本間」と小さい声で俺は姿が見えない本間を探していた。
「ハァハァ・・・」他の2人が荒い息であたりを駆けていた。
男と鬼ごっこをしていながら俺たち4人は体力を消耗させていた。
そして途中で本間がいなくなったのだ。
「おーいここだよー」
本間の声が聞こえた。3人で走っていくとそこにはちゃんと本間がいた。

「ハァー遅そいよ」と武田がいった。「ごめんごめん」と大してわびてなさそうに言った。
否。別の感情によって自分の気持ちが束縛されているそんな感じだ。
「どうした顔色がよくないぞ」音椰が心配そうに聞いた。
「・・・皆、落ち着いて聞いてくれ」本間がゆっくり口を開いた。

俺たちは恐怖に心振るわせた。むしろ知らないほうが良かったのかもしれない。

俺たちは数分後羅生門の近くに戻っていた。「やっぱりだ」本間は無我夢中であたりを見渡す」
「本当なのか？」俺は心配で言った。「ここはあの男が勝手に作った電子空間なのか」

沈黙が続いた。しかし穏やかではない。いまとても内心ザワザワしていて気持ち悪いくらいだ。

「ああ」

「電子空間緊急用保護プログラムがもう少しで切れる」と長い沈黙を破り話を始めた。
「緊急用保護プログラム？」武田と音椰が同時に首を傾けた。

「ああ電子空間で痛みを感じないようにするシステムがあるだろ。さっきみたいに銃弾が当たっても痛くないシステム。まあお前のベルトは壊されてるけどな
と俺の腰を指でさして言った。

「通常、電子空間ではこのベルトに常に充電ができるような場所となってるんだ。普通の大気とは違うんだ」「だからここは臭いの」武田これは死臭だ。てか消臭機能使えよ…！！
「まさか、今俺たちは消音機能とかいろいろ使ってるけど、これも使えなくなって…」本間は軽くうなずいた。「そう痛みも感じるようになってくる」

「大正解だ４人の少年たちよ」
俺は背中に冷水をぶっ掛けられた以上の寒気を感じた。
「見つかったか」音椰がいった。「いや違うあいつは俺らの居場所を知っていたんだ」またまた本間が解説を入れようとした。「そうここは俺の電子空間だからな自由に設定できる」

「つまりお前らで遊んでいたんだよ」男は銃口をこっちに向けた。

【現実空間】
「現在、アクセスが不可能となっている電子空間ですが、電子空間管理局によると不正な空間が他の空間と連動して他のとの連絡をすべて遮断しています」

「ちょうどウイルスのような感じで感染しています」

夢なら覚めてくれ…俺たちの前には銃口が向けられている。

真・羅生門＝悪夢の３０分＝

銃口から１発の弾が飛び出て俺の髪を掠めた。
銃口から煙がもうもうと出ている。殺される…。本間と武田は俺の右横１メートル地点に音椰は左斜め後ろにいる。
とっさに俺の脚が右側に動いた。赤い線を引いた弾が俺の左を掠めた。

「いいねー。もっと俺を楽しめさせてよ」男が不気味な笑みを見せた。

武田は少し後ずさりした。音椰は…後ろにいるから何してるか分からない。

「最後のトラップ電子妨害＋α！」来ました本間のトラップ。

「さあ今あの男の目は何も見えていない…１０秒だけ。電子レーダーの動きも１０分妨害できる。早く逃げろ」

という前に全員逃走した。

ここでベルトの電力がすべてなくなった。消音機能がなくなりたまらない。まあ俺はベルトがなくなったころから臭っている。
さっきから鼻の刺激を探知する部分にゾウガメの甲羅の厚さ並みの板でも詰まってんじゃないだろうかと思うくらいにおわない。恐らくにおいに関する脳細胞がが死滅したのだろう。

男から俺たちはただ逃げた。逃げるしか方法がなかったのだ。

そして１０分間がたった。

「あいつはもうレーダーが使えるようになったかな」「多分ね」

武田と本間が話しているのを軽く無視して全方向に神経を尖らせていた。

【現代空間】

現在１０人前後が電子空間に閉じ込められていることが判明しました。後２０分ほどで救出できると思われます。

そのとき例の男の足音が聞こえてきた。

真・羅生門＝Who is a traveler＝（誰もみな旅人）

「ここにいたかガキが。生意気な業を使い上がって」男が持っていた武器は片手で打てる自動小銃に変わっている。男が作り出した電子空間であるから普通に可能だ。

俺は頭が真っ白になりそうだった。読書感想文という宿題を終わらせようとして、ワープしたらなぞの男がいた。そして友人を連れてきたらこの有様である。

「何故こんなことをするんですか。てかなにをするんですか」武田が男に向かい言った。男は世界が認める無表情でこういった。

「俺は人が死から逃れる必死さを見てるとおもしろくてたまらねー」

俺は大粒の冷や汗が額を流れるのが分かった。とりあえず今の状況で言えることは、この男が狂ってるということだ。

オレンジ色の線が武田に延びていった。赤い液体が飛沫した。

「ぁう…っ」声を出し静かに倒れた。

これは何かの夢だろ。そうだきっと夢だ…。俺の視界は真っ暗になった。

α－1

「ふー…らー」「ふじーはら」誰だ？「藤原！」ん？「起きんか！！」ガン！！

「イてァァ」俺は飛び起きた。周りから笑い声が聞こえた。

「痛いのがいやなら最初から起きてろ。こうやって起こってる時間がもったいない！そもそもお前は――――」教員がごちゃごちゃと説教を始めた。

ここは教室。授業中？学校。あれ武田は？音椰と本田あの男は？
「聞いてるのか？夢にいつまでも浸ってるんじゃない」
あれは夢だったというのか？「すいません」とりあえず混乱した頭で俺は教員に謝るという動作をすべきという判断をして発言した。
「フッ分かればいんだ」
チャイムが鳴った。
「はい今日はここまで。武田宿題の範囲藤原に教えてやれ」そうそう俺の名前は藤原だ。いままで言ってなかったな。

武田はいつもどおりの顔で俺の近くに来た。
「熟睡だったね。ハハッ宿題の範囲はね」俺の顔に何か付いてるのだろうか？笑うほどのものか。
ん？黒板を俺は見た。9月2日。そういえば昨日始業式をしたような。
「武田俺は読書感想文を出したのか？」「何言ってるの？読書感想文をださずに短変小説を変わりに提出したじゃん」うちの学校は読書感想文を書いて何になるんだという生徒に対抗すべく、じゃあ短編小説を書くかのどちらかということになってる。もっとも何の解決にもならないが毎回5人くらいが出している。

「題名は”誰も旅人”だったよ。大丈夫？」

その言葉を聴いた瞬間、瞬間俺の意識はいったん消失した。

β－1
武田が倒れたのを見て俺は走り出した男の所へ。

真・羅生門＝Who is a traveler＝（誰もみな旅人）（後書き

次回　更新予定日１１月１６日
題名「死に喜びを」

真・羅生門＝死に喜びを＝（前書き）

αとβをごちゃにしないように呼んでくださいね。

真・羅生門＝死に喜びを＝

β－1

武田が倒れたのを見て少年はは走り出した男の所へ。

男は少し慌てつつ自動小銃をぶっ放した。赤みを帯びたオレンジ色の火線が少年のよこをかすめるように飛翔する。

男まで後5メートルというところで右肩を何か熱いものがえぐり、腹部に2発の弾丸を受け少年は2回ほど回りながら倒れ伏した。…意識がもうろうとする。本間と音椰が何か叫んでいるような声が聞こえた。

α－2

ハッとなって少年はわれに返ったどうもさっきの教室らしい。「終礼はもう終わったよ。寝すぎだよ」と武田が笑いながらいってきた。「さあ帰ろう　部活あったっけ」「今日は無いよ」と少年は根拠も無いことをいいながらエナメルバッグを持ち学校を後にした。幸い本当に部活は無かった。

少年と武田は家の方角が同じで武田のほうが2キロほど家が近い。只、武田は歩きで少年は自転車通学だ。まあ数学の文章問題の前置きのごとくどうでもいい。そして2人はこれと同じくらいどうでもいい話をしていた。武田のためにスピードを落としていたため少年はバランスを崩し自転車と共に、そして盛大にひっくり返った。「大丈夫？」武田が慌てて自転車をどかす。軽く打った頭を擦りながら少年は身を起こした。さほど頭がいいわけでもないので大丈夫だろう。「うん…大丈夫」と体を起こし武田を見た。「ありがと・・・」礼を言う前にある感覚に少年は襲われた。

β－2

「待ってろ　後で必ず！絶対くるからな」といい音椰と本間は逃亡した。武田は気を失っている。男は「この2人だけ殺そうかな」と残りの2人は興味がなさそうに呟いた。「人を殺して・・何が楽しんですか」足が震え肩と腹部がずきずき痛む。「ハッ別にいいだろ。死ぬことは怖いことじゃないだろ」と男が言ったのに対し少年は驚きの声を上げそうになったが傷口が傷むため言葉にならなかった。

「結局人間いつか死ぬ。それが早かろうが遅かろうがそれは変わらない。死ぬということは生きる苦しみを放棄して楽になれる」何を言っているのだろうか。血が抜けて頭がまわらないのもあるだろうがこの男の言葉が理解できないのはそれだけではないだろう。恐らく常人では理解できない話だろう。

「この空間のモデルの羅生門だ。最後に”下人の行先は誰も知らないで終わってるだろう。最初下人は死のうかと悩んでいた」男はまだ語る。

「結局この下人殺されただろうな。でも苦しみから抜け出せてよかっんじゃなかな？よく自殺するやつにこの世に生を受けたのに…神様から…罰を受けるぞ。なんていうやつがいるよな。じゃあ俺がその生きる苦しみから死ぬ喜びを与えてやるんだよ。俺は自分の趣味がこの世界の人間を救うと思っているんだよ。互いに自分のことのために理解できず争うだけのできそこないの生命を俺が”死”という喜びをあたえ救っていくんだよ」

そこまでいうと少年に銃口を向けた。

次の瞬間、自動小銃の連射音が聞こえた。

真・羅生門＝死に喜びを＝（後書き）

次回更新日　５日後の…２１日。あっ期末が…しばらく更新できないかも。

題名「生への要求そして喜び」

真・羅生門＝生への要求そして喜び＝（前書き）

試験でかけなかったお。大変申し訳ない。

真・羅生門＝生への要求そして喜び＝

β－3

その自動小銃の音は奇妙な音だった。同時にその音は男の狂った世界を破滅に導く否、終止符を打つものとなった。男が手を押さえて倒れた。銃は金属音をだして地面におちた。

男の右手は痙攣を起こしているようだ。「大丈夫か」銃を撃ったと思われる人がそこに立っていた。空間特殊勤務部隊の人たちのようだ。助かった…。この人たちがつかっていた弾は毒薬軽弾という意味の分からないもので、なんでも撃ってあたると大した外傷は無いが痙攣などを起こすらしい。

そんなことが出来るのかといわれても知らないが電子空間ワープとか言う超高等技術（？）を扱っているところに勤務している警備隊的なものだそんなものがあってもおかしくない。

音椰と本間がいる。うっ…少しずつ意識が薄れてきたようだ。まぁ武田もこれで大丈夫だ…。

α－3

「武田…お前大丈夫か」言葉がようやく出せたとはこのことを言うのだろうか？その時俺の頭にいろんな記憶が混ざってきた。――男が撃たれた…それから、いやその前に俺はその男に走って行って…頭の中を複数のなにかが渦を巻き滅茶苦茶になり、俺の意識は再び消失した。

αβ－1

渦巻き状の何かが頭の中をぐるぐる回っているたのが解消した時

には、俺は見たことが無いような天井を見ていた。”ような”というより”見たことが無い”と言ったほうが正しいかもしれない。
本間、音椰がそこにいた。
「お、目が覚めた」音椰が言ったのを聞くと本間が「ああ、ようやく起きたか」と言った。
「ここは」以下にも眠ってましたという声で俺は聞いた。まあ実際寝てたんだが。

「ここ？病院だよ」とやや笑みを浮かべながら本間が答えてくれた。「目が覚めたなら医者呼ばなくちゃ」といいながらナースコールのボタンを押した。

でまあそれからは分かると思うが、母が来て最終検査でどうやらこうやらで、空間管理局から見舞いが来て、警察まで来て事情調査（？）だったかな？を受けた。

細かく話してると日が暮れそうだ。で、まあ本当に日が暮れるころ武田とようやく面会できた。

入るなり武田は「やあ、大丈夫かい」「そりゃこっちが聞きたいな」と言い返した。

それでなんやかんやで9月1日始業式に出た。お互い軽傷ですんだらしい。電子空間ワープ管理局は1次的にサービスを停止した。
読書感想文？ああ8月31日バタバタ書いた。初めて最後の日まで宿題を残した。

それより夢の中（と思われる空間）で俺が書いた【誰もみな旅人】とは一体なんだったのか。今となっては知る術は無い。

真・羅生門＝生への要求そして喜び＝（後書き）

１０日も更新してないとはびっくり。

真・羅生門＝遥かな旅路＝

あれから2年もの時間がたったのか。俺らは高校に入学した。あの事件以来空間管理局の方でいろいろ有り一時的に使用禁止になり、俺らが入学した5日後くらいにスタートした。

利用者は減ったようだがまあみな他人事だろう。とか言っている俺らもたまにしているのだから懲りないというかなんと言うかもうどうでもいいんだろう。

本間はお前そんなに頭が良かったのかといわんばかりの勢いで学年ベスト10位にはいるようになり、音椰は…裏切りものめぇぇ。彼女いらない同盟作ったのお前じゃん。

で、武田は俺と同じく中間の順位で何をするわけでもなくブラブラしている。嗚呼、あの事件のときカメラを強制的に断ったがいっそのことしとけばよかったかもな。と、彼女と歩いている音椰を見るたびに5回中1回は思う。

さてそれはともかくだ、さっき空間管理局が再びサービスを再開したといったが、只再開したわけではない。新たなる機能を持たせて再開したのだ。

一体感方ワープゲームだ。そのまま鬼ごっこやはたまたサバイバルゲームまでの幅広いジャンルを可能としたゲームだ。最初からこっちを作ればよかったのにとしみじみ思うね。

使用方法は簡単。従来の空間ワープ用のベルトをつけてそれが利用できる操作をすればあら不思議。場所設定を選べばゲームスタートだ。武器は自分が所持しているのが使える。服装もそのままだ。

もちろん管理局のほうに課金としてリアルマネーを出せば服装くらい変えれるが…。

そして7月涼しかった季節からもうもうたる暑さが厳しい時期となりナメクジのごとく教室でぐったりとしていると、クーラーが付きみんな生き返る。そんな日々をすごしてもうすぐ夏休みというときだったかな。うーんちょうど音椰が彼女のボールペンのバネを盗んだといういたずらが徐々に大げさになり別れたころだ。まあお互い飽きていたのかもしれん。この季節での恋人喧嘩を乗り切れば大体1年は続くといわれているため、運命の人ではなかったんだな的な感じで俺達のところに舞い戻ってきた。

課外が無い高校に入学していた俺らは昔のごとくダラダラ宿題は早くという作戦で行こうとし、早く夏休みになれとカレンダーを見て呪詛を吐き捨てていた。

あのことが起きるまで何も変わらなかった。

真・羅生門＝遥かな旅路＝（後書き）

前回で終わらせようかな的なことを一月前から考えていたんだけど、続けるという事に。

タイトルから離れてる？何それおいしいの？

真・羅生門＝Who is a traveler2＝

７月２０日　貧血になるような時間校長やら教頭やらが中学校じゃあるまいに長々と話をしている。行く予定は無いが大学もこんなのか？まあ大学はこんなんじゃないよな。大型連休なんて望むべくも無い。時折「静かにしろ」という先生の声が聞こえる。誰が喋ってんだか？暑いんだから喋らず早く終わろうぜ。

３０分後…そしてようやく終わった。そう終了式が終了して通知表を３日前に３者面談で貰い「これといってすごいのが無いね」という５段階評価で４と５で構成された通知表を見て親はそう呟いた。５がすごくなかったら何がすごいんだ？１とか２か？あえて３か？まあ８０点以上が５になるのだが、俺の通知表の５は８０点ぴったりで５なのでそのことを言ったのかもしれない。

俺は勝手にｗｉｎｄｏｗｓがバックアップを行っているような時のいわゆる「ハァー・なしかのー」みたいな顔をしていた。ん？どんな顔か分からない？豆鉄砲を食らって人間の行動に疑問を感じるハトのような顔をしていた。それでも分からない？中間考査のテストで（※期末は認めません。あくまでも中間に限定します）携帯がなったやつに先生が近づいていくときの顔だ。それでも分からないならしょうがない。

でまあそんな顔をして先生の話をまともに聞かずただただ視線をそらそうと虚空を見つめていた。

それで終了した１学期。夏休みの始まり！

その日は宿題の２割を終わらせて１１時に寝た。（簡単すぎるぜ数学。何これ中学校の問題？）

８月２１日　音椰が家に来た。時間午前１０時
「速っ」と俺の宿題を見て音椰がそういった。お前が来るのが速いよ。

「で、今年は読書感想文何書くの？羅生門？」この野郎。
「さあね芋粥でもかこうか」「なんで芥川龍之介さん作品シリーズでいくの」という素朴な疑問に俺は２文字で答えた。
「さあ」それでその後ゲームして昼飯を取りながら俺が昨日２割書いた宿題をもぞすごい速度で書き写して、さらには俺がその後１割終わらせたのだがそれまで写した。こいつにコピー機などいらんな。とどうでも言い事を思いながら俺は宿題を見せていた。

その時だった。
ピンポーン　ピンポーン　「貧ぼおー」うるせぇよ！！
家のチャイムを２回押したあとおもしろくないギャグをいって来たのは武田だ。うちがいつ貧乏になったのか１００文字以内で言ってくれ。

それで武田は俺の部屋に駆け上がると少しして宿題を音椰に負けず劣らずの速度で写した。

「さーて頑張ったし気分転換に空間ワープして走り回ろうぜ」お前がいつがんばった？俺は知りたい。

「まぁワープするか」俺は空間ワープベルトでボタンを押した。
ウィィィィ…

この視界がだんだん暗くなっていくのがワープの特徴だ。あの時間前は無かったが、セキュリティ的なものを増強したらこうなった

らしい。分からんな。

しかし俺がワープしたところには音椰がいなかった。

真・羅生門＝Who is a traveler3＝

そこは音椰がいなかったばかりかちょと幼くなった武田がいた。俺は自転車にちょうど乗ろうとする前の、いわゆるハンドルと荷台を抑える格好でいた。ん？何でこんなことになってんだ？

「なんかのミスかな」と俺は武田に話しかけた。すると武田は「何？どうかしたの？頭ドッか打ったの。ってか少し身長伸びた！？」何だ？何を言ってんだこいつみたいな顔をしてきた。俺も同じ気持ちなんだよ。お前は何を言っている、てか音椰はどこにいった？

はっ…俺はこの感覚を知っている…。そう俺は自転車に乗ってて転んだんだ。そうここは！！俺例の事件に巻き込まれたときみた幻想（？）いや何だ幻想ではない。パラレルワールド？

何故こうなったか分からないが俺がとる行動は一つだ。

「いやなんでもない」武田に中学時代接していた態度でそういった。声がいまだ高いため若干感じが違うだけで別段変に思われなかった。

あの時はいろいろ記憶が混雑していたが今回はそうはならないそうだ。まあ今回もなったらまた例の男が撃たれるとこに戻らなくてはいけない。そんな事をしていては俺は正気ではいられないだろう。

ごちゃごちゃ考えていると

「ねえ”誰も皆旅人”ってどんな話だっけ？」武田が俺が聞きたい問いを俺に言ってきた。そんな事を言われても分かったものではない。

「なんつーか。こうあのアレだな」何が言いたいのか俺には分からない。俺がわからないのだから武田がわかるわけが無い。今言ったのが分かったというのなら間違った事を教えたことになる。

が、武田は笑いながら
「藤原は昔から説明が下手だからね、クハハ」馬鹿にしてるのだろうか。だが馬鹿にしてくれてありがとう助かった。馬鹿にされて礼をいっている俺はMなのだろうか？まあ馬鹿を連発していてもいい気分になれたものではないからもうこの変な考えをやめよう。

それから幾分たち武田は家に帰り着いた。俺はその後自転車で巡速１０キロでダラダラと民家が少なくなる道ををとおり家へ帰宅した。どうすればいいかわからず、どうにもならないから何もしない事にした。

俺はふと机の引き出しを見る。ワープ用のベルトが無い。どうやらこの世界には無いようだ。
ただ変わりにへんなノートが見つかった。いや手帳と言ったほうが正しいか。

俺はそれを開き殴り書きされている文字を見た。自分の字だがこんなのを書いた記憶は微塵も無い。

…成るほど。これは大体のストーリが書かれている。下書きかな？

そしてタイトルらしきものがデカデカと書かれていた。

「これか…」俺は今までわからなかったものが遂にわかるときがきた。題名は”誰も皆旅人”だった。端に”英語にする”と書いているところ見ると間違いはなさそうだ。

俺は１文字１文字読み出した。

真・羅生門＝Who is a traveler3＝（後書き）

毎日見てくれる人がいてアクセスが０になることがありません。ありがとうございます。新／真・羅生門シリーズは恐らく次回で終わりかな？

真・羅生門＝Who is a traveler"契約編"

誰だよ次完結って言ったの？勘違いも大概にしろよ自分。

なんか勘違いしてたらしい。まだ終わりません。

真・羅生門＝Who is a traveler"契約編"

「面白くない。何も面白くない」少年が一人パソコンの前で呟いていた。面白ゲーム集というキーワード検索でゲームを探す。やる。面白くない。の繰り返しである。

もう辛い。生きてるのがしんどい。たかだか自分のゲームに対する欲求が満たされないためにイライラしていた。

こんな身勝手な少年に友人などあまりいなかった。毎日が面白くない。なんでこんなにおもしろくないんだろう。何か人生を変えるくらいのことが起きないかな。

「俺と契約しないか？」そこにいたのは誰？まあ単刀直入に言えば男だ。２０代か３０代しか知らないが変な男がそこにいた。どこから沸いてきたんだ？

「誰だお前」少年は大焦りで聞いた。

「誰だっていいだろ。どうだ少年よお前の願いを叶えてやる。面白くないこの世界から離れたいのだろ」男は淡々と言う。

「…ああ」少年は恐る恐るしかし好奇心に駆られた少年のような目を…少年か。

まあともかくだ、救世主が少年の前に現れたといっても過言ではない。怪しいことを除けばそれはさぞかし神々しいのであろう。だが少年は神とは存在が怪しいのだから別段姿が怪しくてもおかしくないのではないのだろうという変な理屈を作成し１人で勝手に納得したのだった。

「で、どうだ契約するのかしないのか」

「契約？」男の”契約”という言葉の意味が分からない。

「契約の内容を話していなかったな。まあ簡単に言えばお前の一番

大切なものを俺がもらうのだ。そうすればお前は面白くないというものから開放されるのだ。どうだおいしい話だろ」男はプロのセールスマンのような巧みな言葉で少年の心を動かすのだった。

「俺の大切なもの。えーっと」早くも契約に応じたらしく部屋を見渡す。

「ハハッ」男はあざ笑うかのような笑いを見せた。その笑いに続けて「お前の願いが叶ってから出ないとそれは分からないのだ」と男がいった。

「俺の願いが分からないとだめ」少年はなんともいえない顔で不服そうに頬を若干膨らませた。が、すぐに直った。何に今自分が不服を感じたか分からないが、そんなのはどうでも良いのだ。少年の脳内は1つのことに支配されていた。”願いを叶えたい”ただそれだけだ。

「いいよ。契約するよ」少年は嬉しさを表そうとしたが普段嬉しさを表したことがない。結果壊れた人形のような妙な動きをした。

「承知した。お前を今と同じような環境でで面白い世界へ送る」”世界へ送る”という言葉に何かしら寂しさを感じたが、もはやどうでも良い。少年はその世界へと送られた。

少年が行った世界はまさしく天国だった。最も筆者は天国に行った記憶が無いので分からないため語弊があるかもしれないため、少年が望んだ世界としておこう。

なんだか送られただけで気分が朗らかになった。そこは自分が望んだようになる世界だった。まるで自分が世界の中心にいるようだ。

学校の友人とでもいままで一酸化炭素のごとく目に見えない邪魔者のように扱われていたのに仲間に入れてもらえたり、道で札を見つけたり、親が小遣いを増やしてくれたり、勉強に関しても「自分のやり方で進めればそれでいい」と言い何も言わなくなったりしていた。

そうかこの世界は自分で面白く出来るんだ。なんでもかんでもおもしろく作りかえれるんだ。

少年はそう考えた。事実ジュースほしいなと思いつつ自動販売機の前を通ると

「君、ジュースいらないかい？間違えたの買ってしまってね」と声をかけて自分が好きなジュースを貰いえたりしたような感じだ」

まあすべて望みどおりになるわけが無い。極端な夢として空を飛びたいとかは叶わない。そのかわり空を飛んでいるようなゲームがパソコンで出来たので満足した。

こうして少年は悪魔が描いた”シナリオ”にドップリと浸かってしまったのだ。

「…フフフあの人間はすばらしいな」悪魔はただただ喜んだ。

その夜少年は悪魔と会った。
「貰いに来たよ。それが許可されれば契約成功だ」
「ハハ…何を失うんだ。まあ一つくらい減ってもすべてが楽しいのだからかまわない」目は死んだような目だ。
「そうだ。君がいた世界を貰うよ」と唐突も無い言葉に少年は何か忘れていたような感覚に襲われた。
「契約終了は2日後だ。そこでこの契約内容を許可すればいい。お前ならどっちを採るか分かるよな」悪魔はそのように行った後視界から消えていった。

「…元の世界か」少年は呟いた。

その次の日間は休みだった。少年は部屋で葛藤を続けていた。
昔は楽しいこともあったじゃないか…でもあの世界は楽しくない時のほうが多かった
前の世界がどうなってもいいのか…今のほうがいい。前の世界は関係ない

葛藤を続ける少年はどちを選ぶのか分からない。

真・羅生門＝Who is a traveler"葛藤編"

少年はどちらを選択するのか？

葛藤を続ける少年をあざ笑うかのように悪魔はじろじろとその姿を見ていた。さあどちらかを早く選択せよ。まあどちらを選ぼうと…。

向こうの世界が消えることを選ぼうと今の自分には関係が無い。しかし過去の自分がいた形跡がある向こうが消えて、こちらの偽の痕跡しかないこの世界を自分は望むとでも言うのか。

――――――――答えは1しつか無いよな…。少年は決意した。

そして向かえた2日後。

いやな雰囲気に包まれた部屋で少年は何をするわけでもなく天井をボヤリと眺めていた。そこからニュルリというよりボワッと言ったほうが正しいような地味な入り方で部屋の床へと舞い降りてきた。いや舞ってはない。

「答えは出たか。まあでなくても強制的にでも聞かせてもらうがな」悪魔が目を赤々とさせ聞いてきた。

少年はそんなものには目もくれないような堂々さで答えた。

「この世界にいることを拒絶します」

「つまり？」

「元の世界に返してください」

「楽しくない世界に戻るのだぞ」と悪魔は少し慌てたように少年を見た。が、

「別にいいです」とキッパリ答えられた。

この世界にいてくれた方が都合が良かったのだが…。まあいさ仕

方ない。この少年を元の世界に戻してから…とぶつぶつ考え出した。

「分かった…」悪魔はイヤミのように言葉を発して少年を元の世界に戻した。

少年は元の世界に戻った。これでよかったんだよな…。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2080w/

読書感想文"羅生門"

2012年1月10日21時49分発行